

小さな赤い花

小川未明

青空文庫

おそろしいがけの中ほどの岩かげに、とこなつの花がぱつちりと、かわいらしい瞳のよ
うに咲きはじめました。

花は、はじめてあたりを見て驚いたのであります。なぜなら、目の前には、大海原が
開けていて、すぐはるか下には、波が、打ち寄せて、白く砕けていたからであります。

「なんとというおそろしいところだ。どうしてこんなところに生まれてきたらう。」と、小
さな赤い花は、自分の運命をのろいました。それはちようと、寒い雪の降る国に生まれ
たものが、暖かな、いつも春のような気候の国に生まれなかったことを悔い、貧乏な家
に生まれたものが、金持ちの家に生まれて出なかつたことをのろうようなものであります。
けれど、それはしかたがないことであります。とこなつの花は、そこに生い立たなけ
ればならぬのでした。花は、ものこそたがいにいい交わしはしなかつたが、自分の周囲に
も、ほかの高い木や、低い木や、またいろいろ異なる草が、やはり自分たちの運命に甘んじ
て黙っているのを見ますと、いつしか、自分もあきらめなければならぬことを知つたので
あります。

天気の良い日には、海の上が鏡のように光りました。そして、そこは、がけの南に面し

ていまして、日ひがよく当たりましたから、花はなは物憂ものういのだかな日ひを送おくることができましたが、なにしろ、がけの中なかほどで、ことにほかには美うつくしい花はなも咲さいていませんでしたから、みつばちもやってこず、ちようもたずねてきてくれませんので、寂さびしくてならなかったのであります。

花はなは、海うみの方ほうから吹ふいてくる風かぜに、そのうすい花はな弁びらを震ふるわせながら、自分じぶんの身みの不ふ幸こうを悲かなしんでいました。

ある日ひのことです。一いびきの羽はねの美うつくしいこちようが、ひらひらと、どうしたことかその辺へんへ飛とんできました。そして、そこに、赤あかいとこなつはなの花はなの咲さいているのを見みつけると、さつそく、花はなの上うえに飛とんできました。

「まあ、珍めづらしく、かわいらしい花はなが、こんなところに咲さいていること。」と、ちようはいました。

これを聞ききつけた、とこなつはなの花はなは、ちようを見み上げて、

「よくきてくださいました。私わたしは、毎まい日にちここで寂さびしい日ひを送おくっていました。そして明け暮あけぐれ、あなたや、みつばちのおたずねくださるのを、どんなにか待まっていましたでありましょう。けれど、今日きょうまで、だれも、たずねてはくれませんでした。ほんとうに、ようこ

そきてくださいました。」と、花はちように話しかけました。

すると、ちようは、小さな頭をかしげながら、

「じつは、私は、こんなところに、あなたのような美しい花が咲いているとは知らなかったのです。今日、路を迷って、偶然ここにきまして、あなたを知ったようなわけです。

それにしても、なんと、あなたは、やさしく、美しい姿でしょう。」と、こちようはいいました。

「あなたが、路をお迷いなされたことは、私にとつてこのうえないしあわせでした。私は、まだ世の中のことを知りません。どうか、私たち仲間が、どんな生活をしているか、私に聞かせてください。」と、花は、ちように頼んだのであります。

可憐なとこなつの花は、ほかの花たちの生活が知りたかったのです。そして、自分の運命を比較してみたいと思つたのです。

花にこういつて聞かれたので、ちようは答えました。

「そういわれれば、わたしは正直に答えますが、あなたは、ほんとうに不しあわせな方です。あなたがたの仲間は、広々とした野原に、自由にはびこつて、いまごろは、赤・青・黄・紫・白というふうに、いろいろな花が咲き誇つて、朝から晩まで、ちようや、

はちがその上を飛びまわって、それはどんなにぎやかなことでありましょう。「といいました。

「まあ。」といって、とこなつの花は、ため息をもらしました。

やがて、ちようは別れを告げました。その後で、花はいつまでも深く悲しみに沈んでいました。

あくる日も、夜が明けると、花は、うすい花弁を海の方から吹いてくる風にそよがせながら憂えていました。

そのとき一羽の名も知らない小鳥が、そばの木立にきてとまって、花を見おろしながら、「おまえがいちばんしあわせ者だ。そんなに悲しむものじゃない。」と、花にいつて、どこへか飛び去ってしまったのです。

とこなつの花は、小鳥のいったことが、ただ自分を哀れに思つてなぐさめてくれる言葉だとしか思いませんでした。その後、花は、さびしい日を送つてきました。

日の光は、だんだん南の方へ遠ざかりました。そして、海の上から吹いてくる風が寒くなりました。しかし、そこは、うしろの北には山をしょっていました。ほかから見れば、ずっと暖かでありました。それですから、とこなつの花の葉は、いつも青々としていま

した。

ある朝のことであります。太陽が海から上がってまだ間もない時分でありました。いつかのこちようが、昔の面影もなく、みじめなみすぼらしいふうをして、しよんぼりとたずねてきました。両方の羽は、暴風にあつたとみえて疲れていました。

「どうなさつたのですか？」と、とこなつの花は、びつくりしてたずねました。

「もういわんでください。昨夜の暴風で、花という花は、すっかりしぼんでしまい、私はみんな死んだり傷ついたりしました。私は、やっとここまで逃げてきました。どうぞ、しばらく休ませてください。」と、ちようは答えました。

その晩、この南の海に面したがけにも霜が降りたほど、寒かつたのです。あくる朝、花は目をさましますと、美しかったこちようは、傷ついたまま冷たくなって葉の上に気絶をしていたのです。花はもどかしがりながら、早く太陽が照らすのを待っていました。そのうちに、風が吹くと、ちようの体は、深いがけの下に転がり落ちてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「良友」

1921（大正10）年4月

※表題は底本では、「小《ちい》さな赤《あか》い花《はな》」となっています。

※初出時の表題は「小さい赤い花」です。

入力：ぷろぼの青空ワークチーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

2014年9月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さな赤い花

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>